大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# 古代における中国正骨術と日本正骨術の淵源関係



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-04-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 李, 強<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24729/00016783 |

# 古代における中国正骨術と日本正骨術の淵源関係

李　　強

## 一、はじめに

大宝元年～天平宝字元年[1]の間に、正骨術は中国古代按摩術に付随して日本に導入された。『養老医疾令』按摩咒禁生学習条や典薬寮按摩博士の職掌範疇がその証左である。のちに、元、危亦林『世医得効方』（至正五年（1345））が日本に導入され、正骨薬物内服全身麻酔法、「十不治証」、「六出臼、四折骨」理論、骨折・脱臼整復法という多方面において、古代日本正骨術の形成に決定的な影響を及ぼしたという史実がある。さらに江戸時代に明代の詩人であり、もと少林寺僧侶の陳元贇（1587-1671年）が中国の拳法と按摩正骨術を日本につたえ、普及させた。その後、江戸時代中期[2]に至って初めて日本按摩術・正骨術は産声を上げたと考えられる。日本正骨医たちは中国から日本に導入した按摩正骨専門書の傷骨科の医学理論を全般的に継承した。その成果が江戸時代に誕生した三冊の正骨専門書、すなわち高志鳳翼『骨継療治重宝記』（延享三年（1746））、吉原元棟『杏蔭斎正骨要訣』（天明九年-寛政元年（1789）～寛政十二年（1800））、二宮彦可『正骨範』（文化五年（1808））である。

この方面における日本側の先行研究に以下のものがある。中山清は『骨継療治重宝記』の原典を抄写し、脱字欠字を指摘し、随所に独自の解説のメスを入れた[3]。蒲原宏は、『養老律令』戸令（天平宝字元年（757））の中に「残疾」「廢疾」「篤疾」、源順『倭名類聚鈔』（承平年間、931-938年）に「駢拇」「痿痺」の損傷性疾患に類似した名称の記載があるにもかかわらず、織豊時代（即ち安土桃山時代）[4]まで、日本古典医学文献に按摩或いは正骨による治療実例に関する記述が一切、見当たらなかったことを指摘している[5,6,7]。

陶恵寧は『正骨範』に関する論述の中で、整骨手技、整骨工具、外治療法の三方面から、江戸時代の整骨法の特色を簡単に触れている[8]。

山本徳子は『正骨範』が杉田玄白らの翻訳書『解体新書』（安永二年～安永三年（1774））より三十四年後に刊行されたことに言及し、漢方より蘭学の実用性と科学性が高いと思われた時期に『正骨範』が刊行されたことはとても意味あるものと認識している[9]。

成高雅は『骨継療治重宝記』の具体的な内容を整理・分析した。「『骨継療治重宝記』は、中国医学書を盲信する傾向がある」「中国正骨術を主とする著作であるが、解剖学の部分は紅毛流外科の論述を引用したことがあり、お互い矛盾したところに批判なく、混然と羅列した」と指摘している。また、「実際本文には『正骨続断方』を殆ど引用していない」と断言している。一方、序文を書いた「穂積以貫」という人物の名を「保積以貫」と記している。単なる誤写の可能性がある。また、「婆羅門」をインド僧侶であるという意味ではなく、単なる「僧侶」という意味に解している[10]。

海老名大五朗は江戸期に重要な接骨術の医学書を紹介するが、その中には、なぜか吉原元棟の『杏蔭斎正骨要訣』を取り上げていない[11]。

中国側では、長い間、高志鳳翼『骨継療治重宝記』と吉原元棟『杏蔭斎正骨要訣』の存在すらも知らず、あるいは重要視しなかった[12,13]。むしろ『正骨範』の方がよく知られている。1936年に『正骨範』は陳存仁[14]主編、上海世界書局が出版した『皇漢医学叢書』の第八冊に収載されている[15]。さらに、1955年、人民衛生出版社がその名を『中国接骨図説』に変え、再版した。書名を変えた意図と経緯については不可思議である。1975年、台湾大新書局がその復刻本を出版した。1987年、中医古籍出版社は『北京大学図書館館蔵善本医書』の中にあった李盛鐸[16]旧蔵「文化五年（1808）擁鼻蔵本」影印本を刊行した。90年代以降、上海中医薬大学出版社は上海世界書局の『皇漢医学叢書』鉛印本校勘再排方式で再出版した。それも同じ第八冊に再収載されている。このように複数回、印刷されたことにより、『正骨範』は『中国接骨図説』として、中医界に広く受け入れられるようになった。つまり、これは、中医界が『正骨範』に記述された正骨法などが正真正銘の中医傷骨科のものだと信じている証左である。ただし、『正骨範』そのものに対する系統的な研究は拙著[17,18]しかなかったのが現状である。

韋以宗は中国の「整脊療法」を最も早く日本に導入したのが「移民（渡来者のこと）」「高志鳳」であるとした。そして吉原元棟が自分の弟子二宮彦可を中国に派遣して正骨術を学ばせたのちに『中国接骨図説』を著したことを記している[19,20]が、史実を示していない。さらに、「高志鳳翼」を「高志鳳」とし、日本人であるのに、中国人であると誤認している。

このように、日本では、上記の三冊の正骨の専門書に対して、蒲原氏をはじめ、多くの研究がなされているが、陳元贇との関わりや彼の貢献度に関して詳しい報告は蒲原以外にはない。中国側では、書籍の紹介や出版の段階に留まり、各々の著者、多くの中国骨傷科の書物からどんな影響を受けているか、どういう人物により実技を導入したかについて、深く考察した論文はない。また、吉原元棟の『杏蔭斎正骨要訣』に対しては言

及もなく、出版もない。

拙稿[21]は、上述した先行研究を踏まえ、三冊の江戸期正骨の専門書がいかに中国古代按摩整骨術や傷骨科理論体系を導入したかについて検証し、作者三名の人物像、それぞれの書物の内容、中国からどのような影響を受けたかなどについて考察する。

## 二、『骨継療治重宝記』

### （一）高志鳳翼について

著者の高志鳳翼は、名は心海、字は玄登、号は鳳翼・慈航斎である。摂津国[22]摂陽難波邑（なにわむら）に生まれ、生卒年は不詳である。居所は般若堂という[23]。江戸期に大坂[24]にて私塾を開いた儒学者穂積以貫[25]について、漢学を学び、『骨継療治重宝記』を著したという[7]。しかし、高志鳳翼については不明なところが多い。

『骨継療治重宝記』は初版と補正版がある。香山三因斎高吉による跋文（寛保三年(1743)）、穂積以貫による序文（延享乙丑年（1745））、前田春碩による跋文（延享乙丑年）、古林武正による跋文（延享丙寅年（1746））、高志鳳翼の自辞（延享丙寅年）がある。これらの文献は本研究において重要であるため、これらの史料を解読することによって、高志鳳翼という人物の輪郭を描写したい。

### （二）穂積以貫による序文

まず、儒学者穂積以貫の序文（延享乙丑年（1745））には、

> 夙（つと）に古学に志（こころ）ざして家塾に来（きた）り、而（しこう）して経を執（と）りて難を問（と）ひ、孜孜休まず、古を茹（くら）ひ今を含み、知博くして才達す。千里の駒（こま）は、其れ斯（こ）の人[26]に在（あ）り。囑（しょく）して又た医学に耽（ふけ）り、人を済（すく）ふこと許多（あまた）。中に就きて[27]、夫（か）の刃傷（にんじょう）、打撲（だぼく）、墜堕（ついだ）等の項（ことがら）、過（あやまち）て支體を虧（か）く者を憫（あわれ）み、『青嚢（せいのう）[28]襍纂（ざっさん）』[29]中に載する所を原（たず）ね、『正骨続断方』に一書を為（つく）り、将（まさ）に以て世に弘（ひろ）めんとし、名（なづけ）て『骨継療治重宝記』と曰（い）ふ。遂（つい）に序を予（われ）に問ふ。予（われ）素（もと）より其の術を諳（あん）せず、何ぞ軒輊（けんち）を為すに足（たら）んや。唯（ただ）其の世を憂（うれふ）るの志、或ひ

は仁に近（ちかき）を嘉（よみ）し、為（た）めに一辞を巻首に附すと云ふ。
延享乙丑年春三月
穂積以貫伊助、叙（じょ）す[30]。

とみえる。

高志鳳翼に漢学を教授した穂積以貫が寄せた序文によれば、高志鳳翼がいわゆる『青嚢襍纂』という書物からヒントを得て、『正骨続断方』を模倣して『骨継療治重宝記』を書いたことがわかる。明邵以正の『青嚢襍纂』は、道教医学の叢書として有名である。その書物には、確かに『仙授理傷続断秘方』とほかの七種医書（『仙伝済陰方』、『徐氏胎産方』、『秘伝外科方』、『済急仙方』、『上清紫庭追閻盂癆方』）が構成されるほかに『秘伝経験方』をも附している。『正骨続断方』のことは間違いなく唐蘭道人の『理傷続断方』のことを指していると思われる。本文の内容を読むと、『理傷続断方』を始め、少なくとも二十冊近い中国医学古典の傷骨部分を抜粋して参考にしたことが認められる。この点については、後述する。

### （三）古林武正による跋文

古林武正[31]による跋文は、

夫（そ）れ、天に六気[32]有り、人に六淫[33]七情[34]有り、相ひ侵（おか）して衆疾成る。蓋（けだ）し病に標本緩急有り、症に寒熱虚実有り、是（これ）由（よ）り脈証を察して布（し）きて能く治む。薬性[35]気[36]味[37]を詳（つまびら）かにして、七方十剤[38]を、其の宜（よろ）しきに随（したが）ひ、陰陽榮衛[39]其の元（もと）を理（おさ）む。若（も）し自（みず）から熟学研究するに非（あら）ざれば、何（なん）ぞ至察して病を知り、之を療するの可否（かひ）を明（あきら）かにせんや。是（これ）実（じつ）に竅[40]の大本領なり。然りと雖（いへど）も又た六気七情に感傷せずして不虞の患に罹（かか）り、折傷を蒙（かう）むる有る者、最も宜（よろ）しく哀傷すべし。是（こ）の術を治め、吾（わ）が方を行う者、年（みのり）有り。而（しか）るに未（いま）た鏤梓（るし）する者有らざるなり。今（いま）や、高志氏、其の述を詳（くわ）しくし、書（しょ）するに、国字を以て剞劂（きけつ）に附（ふ）す。氏、将（まさ）に世に広（ひろ）めんとするは、仁厚と謂（い）ふ可（べ）きなり。僕、其の人を知らずと雖（いへど）も、予（わ）が友（とも）来（き）て其の後に書（しょ）

せんことを索（もと）め、固辞する能（あた）はずして以て跋すと云ふ。

延享丙寅年仲秋　攝城[41]處士[42]、古林〔泰〕武正、見宜堂[43]に書（しる）す[44]。

とある。

上記の「攝城處士、古林〔泰〕武正」「吾が方を行ふ者」と称した文面から、古林武正（号を泰とする）は大阪の漢方医であったことがわかる。確かに、寛文年間漢方医生の古林見宜の後人である。「僕、其の人を知らず」とあり、高志鳳翼との面識さえもなさそうである。そのため、あまり熱意が感じられない。高志鳳翼を「医」ではなく「毉」としている。これはこの文字をわざわざ選んでいるようにみえる。これは漢方医が接骨医を低く見たのではないだろうか。また、接骨医を「大本領」と過分にほめるのは、漢方薬の基本理論すら分からないくせに、長年、漢方をやっていた者よりも先に「鏤梓」して出版したことを揶揄しているように思われる。暗に批判していたのではないだろうか。

### （四）前田春碩による跋文

ついで、前田春碩という人物が書いた跋文の一部には、

大抵（たいてい）の病証（びょうしょう）、四百四病の名目を具（そな）え、及び千万の証候を見（み）はすと雖（いへど）も、而（しこう）して畢竟気血の二に出（い）でず。･･･本邦に此の術を諳（そら）んずる者、寥寥（りょうりょう）として聞（き）こゆること無し。蓋（けだ）し吾（わが）鳳翼君の如（ごとき）は、則（すなは）ち緇林[45]の龍象[46]、毉門の泰斗、朝昏剥啄[47]として、治を求（もとむ）る者尤（はなはだ）夥（おびただ）しく、戸外履（り）満（みつ）。世（せ）医、滔滔（とうとう）として一科に局[48]（かが）まる。先生、好古博識を以て徧（あまね）く十三科[49]を該（かぬ）。最も精（くはし）く毉術に到る者と謂（い）ふ可（べき）かな。且（かつ）余（われ）先生に従ひ教導を受け、経義を上下し孜孜として倦まざらんことを期す。先生、未（いま）だ其の齢三十ならずと雖（いへど）も、最も内典[50]に精（くは）しく、儒に於ひてし医に於ひてし、旁（かたは）ら諸子百家に及ぶ。思を覃（ふかく）し精を研（と）ぎ、書を著（あらは）して、既に篋笥（きょうし）に満（み）ち、中に就（つ）き此の書の不虞（ふぐ）の損傷救ふに急なる者、故を以て頃日、坊人の懇求を許して梓（し）す[51]。

とみえる。

文中の「先生」という語からみれば、前田春碩という人物は高志鳳翼の弟子または学生であったかと思われる。日付は延享三年（1746年）なので、「未其齢三十」に基づき逆算をすれば、1718年前後を高志鳳翼の生年とするのを無理がないであろう。ただし、前田春碩が年上かもしれない。三十歳未満の師に、時には最高級の褒め言葉で、「緇林の龍象」や「豎門の泰斗」と贈っている。

「書を著（あらは）して、既に篋笥（きょうし）に満（み）ち」という句から、高志鳳翼が『骨継療治重宝記』以外に五十一種類に及ぶ多くの著書もあったということがわかる[23]。こられの書物は医学の入門書（例えば『医学童子問』）、治療のための実用書（例えば、痧脹療治集』）、難病治療の専門指南書（例えば『恥瘡療治発揮』『癩病療治集』）、カルテのような医案（『高志豎案』）、医学知識を普及するための「重宝記」シリーズ（例えば『難産療治重宝記』）、さらに仏学・詩経・書経・易学天文などの分野に広がる書名は「慈航斎鳳翼著述嗣出」に網羅されている。上梓した形跡は確認できないが、その天才ぶりがわかる。

また、「先生、好古博識を以て徧（あまね）く十三科を該（か）ぬ」という記述から、高志鳳翼は接骨専門「豎」だけでなく、ほかの診療科目も診察していたことが想像される。自称「豎」であるが、「医」にあらず。これは、漢方医より下位にあるという謙遜か、もしくは正骨業を「医」として見ていないか、興味ぶかいところである[52]。これまで多くの先行研究は高志鳳翼が接骨専門「医」であるとしていたが、その認識は覆えされるかもしれない。

「四百四病」[53]という言い方は仏教用語なので、先述の婆羅門の末裔ということが連想される。「緇林」「内典」ということばもある。居所の般若堂は禅堂の別名であり、仏教禅宗僧衆たちの参禅打坐用功の殿堂である。高志鳳翼は禅宗の僧侶である可能性が極めて高い。

### （五）高志鳳翼の題辞

高志鳳翼が自ら題辞を書いた。

> 華佗　腹を縫[54]ひ、伯宗　癰を徙（うつ）[55]す。
> 奇法神術、医家の宗（そう）なり。
>
> 本邦の文明、学びて相ひ琢磨[56]す。

蕩蕩[57]たり熙熙[58]たり、野老　謳歌[59]す。

内典[60]　儒書[61]、諸子[62]　百家[63]、
群籍[64]　梓行し、五車[65]に堆積（たいせき）す。

正體の書、昏晝[66]に開（ひら）く无（な）し、
此（これ）醫術に於て、欠闕（けんけつ）するに非（あら）ずや。

偶（たま）たま一書有り、『正骨秘論』、
之を熟読すること久（ひさ）しくし、深く其の意に達す。

豁然[67]として自得[68]し、乃（すな）わち鄙説（ひせつ）を著（あらは）す。
一（もっぱ）ら通じ易（やす）きを求め、最も直截（ちょくせつ）[69]を要（よう）す。

坊人[70]、梓（し）を請ひ、其の意、惟（こ）れ厚（あつ）し。
速（すみや）かに梨棗[71]に登（のぼ）せ、以て不朽[72]に垂（た）れんことを。

旹[73]　延享丙寅年春正月穀旦 攝陽難波邑 高志心海撰并びに書す。[74]

以上の題辞からみれば、文筆はさすがに漢学者の愛弟子である。少なくとも十以上の典故を引用したうえ、巧みに装飾的な修辞を用いている。

また、『骨継療治重宝記』には、藍本が中国の『正骨秘論』にあったと書いている。しかし、『正骨秘論』という書物は存在しない。『骨継療治重宝記』の書中の内容に照らすと『理傷続断秘方』と『世医得効方』は存在したと推測することが可能であろう。

### （六）香山三因斎高吉による跋文

『骨継療治重宝記』の巻末では、「寛保癸亥年（1743）」に記すとされていた香山三因斎高吉の跋が付されているため、非常に興味深い記述がある。

鳳翼君、名は心海、字は玄登、攝州、難波邑の產（うま）れなり。少（わか）くして学（がく）を好（この）み、壯（そう）にして經史[75]に飫（あ）き、博（ひ

ろ）く諸家の襍説（ざっせつ）に渉（わた）り、旁（あまね）く百氏の奥牒（おうちょう）を探（さぐ）る。且（か）つ又（ま）た医術に耽（ふけり）て、最も正骨続筋の薀（うん）を究（きわ）め、経験、頗（すこぶ）る夥（おお）し。近（ちか）ごろ、又（ま）た一書『理傷続断秘方』と名（なづ）くを得（え）、乃（すなは）ち世（よ）の希（まれ）に獲（う）る所（ところ）、時醫の覩（み）難（がた）き者なり。其の正骨の方に於けるや、略略（ほぼ）精詳（せいしょう）を究（きわ）む、公、其の方に據（よ）り、且（か）つ祖先及び異人の授（さずく）る所の秘冊中、載する所の要方を参攷し、之を沙（よな）ぎ之を汰（よな）ぎ、断（だん）ずるに已が意を以（もって）す、遂（つい）に一帙（いっちつ）を成（な）し、命（なづ）けて『骨継療治重宝記』と曰（い）ふ。学者苟（いやし）くも能く之を周覧するときは、則ち正骨整頓の手法、関節筋絡の機要より、以て薬を用ひ處するの方の意旨に至るまで、徧（あまね）く諸書、を閲することを待たずして、心胸の間に瞭然たらざること莫し、其の功亦大ならずや。今茲（ここ）に董正（とうせい）し業已（すで）に成りて将（まさ）に之を梓に壽（じゅ）[76]せんとし、跋を予に命ず。予欣然として公の泛（ひろ）く惠を海内に施し遐（とほ）く裕（ゆたかさ）を萬世に垂るるの仁心を嘉（よみ）し、為（ため）に鄙言（ひげん）を尾張に附す。謹（つつ）しんで先生の系譜を考（かんがふ）るに。心海貴師、鳳翼と號す、本系婆羅門（ばらもん）姓は高志（たかし）、而（しこう）して大僧正[77]行基[78]菩薩の後胤（こういん）なり。基公は本邦の能化（のうげ）[79]、世の姓（うじ）は高志、是（これ）に由（より）て高志を姓（うじ）とす。而（しこう）して南天竺婆羅門志阿彌法師の苗裔（びょうえい）なり。此（これ）に繇（よ）りて亦（ま）た婆羅門を姓（うじ）とす。烏虖（ああ）先生は卓乎（たくこ）たる、緇林の翹楚（ぎょうそ）[80]にして、醫の明を以て助行（じょぎょう）[81]と為（な）し、最も内典に精（くわ）しと云（い）ふ[82]。

とある。跋を著した「香山三因斎高吉」という人物に関する資料は乏しいが、序文を寄せた穂積以貫と同じ社会の名流、または書肆であるかと考えられる。しかしながら、序文の字句に比べ、跋文に高志鳳翼のことを「先生」「貴師」「公」と称しているため、弟子である可能性も否めない。

まず、高志鳳翼の系譜を記しているからである。彼の本名は高志心海であり、号は鳳翼とした。高志という苗字は奈良時代大僧正の行基菩薩の俗姓であるため、鳳翼は行基

の末裔であるかという説となっている。行基の生地は河内国大鳥郡（現堺市西区）で、彼が開山したとされる神鳳寺（和銅元年（708））[83]がある。高志心海の號は鳳翼であるため、関連があるかもしれない。ただし、「高志」という苗字は宋朱長文『墨池編』[84]巻第十二、賛述二、述書賦下に、「高志宜、渤海[85]の人」[86]とみえるから、北方地域に由来した苗字でもあろう。

この跋におけるもう一説によれば、南天竺婆羅門の志阿弥法師の苗裔であるかもしれないという。塙保一己『群書類従』巻六十九[87]には、「神護景雲四年（770）四月二十一日」において入室弟子伝燈住位僧修榮が書いた「南天竺婆羅門僧正碑文」並びに序文が載せられている。「僧正、諱は菩提仙那、姓は婆羅遲、婆羅門の種なり[88]」という。南天竺から唐に行って、そこで日本の遣唐使「丹治比真人広成[89]」と「学問僧理鏡」の要請を受けた。志阿弥法師が弟子の「林邑[90]僧佛徹」と「唐国僧道璇」を伴って海を渡り、太宰府に上陸して日本に着いた。のちに摂津国に着いて僧行基により迎えられたという史実がある[91]。五十七歳で円寂したが、嗣子がいるかどうかはわからない。

では、「南天竺婆羅門の志阿彌法師の苗裔」の信憑性はさておき、唐『理傷続断方』の著者である蘭道人は僧の可能性があること、明異遠真人『跌損妙方』の著者も僧であることをここで一言しておこう。これは偶然の一致ではないだろう。

また、南天竺であった、現在の南インドタミルナードゥ州セージボガー（Sage Bogar of Tamil Nadu、South India）という地に古くから流行しているMartial Art（≒武術）と「大明国之僧陳元贇」[92]の点穴法、『骨継療治重宝記』書名の中の「療治」という語が仏教用語である可能性などを総合的に理解していくと、どうやら日本最古接骨専門書は仏教・武術・漢学との関わりがあったことが確認できる。

### （七）高志鳳翼は僧医または看病僧であろうか

新村拓によれば、日本平安中期以降、寺院の世俗化が進んだ結果、中下層の僧侶たちは生活の手段、渡世の術として医療に携わるようになり、南北朝の時に法印・法眼・法橋の僧位をもつ僧医が頻出したという[93]。服部敏良は聖徳太子が四天王寺に施薬院・療病院・悲田院・敬田院を作って、広く天下の人々に恩恵を与えていたと指摘している[94]。富士川游は、奈良時代において、医学の権は渡来人の丹波、和気の二家を世襲した医鍼博士、典薬頭に掌握されていたが、それ以降の鎌倉時代になると、多くの日本僧侶は宋に渡って、当時、宋朝の仏教ないし医学を含む中国文化を学んで帰ってきたということにより、徐々に、学問や医学の領域は僧界のほうが上位になった。蓮基、栄西、仏厳、行玄、行蓮、性全などの学問僧や看病僧の名が挙げられる[95]、という。

以上に述べた序文、跋文、自辞をまとめると、高志鳳翼は僧医である可能性は非常に大である。「名心海、字玄登」からみれば、釈家によくある僧名であろうか。「緇林の翹楚」「医の明を助行（じょぎょう）と為（な）し、最も内典に精（くわ）し」からみれば、僧侶の一員であることは明白である。

また、「祖先及び異人の授（さずく）る所の秘冊中、載する所の要方を参攷し」を解釈すると、彼の祖先は大僧正行基または婆羅門僧であるから、寺院に傷骨科の秘冊が蔵匿されていたと思われる。また、『骨継療治重宝記』は、むしろ薬物と整復手技を主な治療法とした薛立斎の流派の流れを汲んでいると思われる。

### （八）中日両国初期正骨専門書の漢文のよみづらいさ

なお、前田春碩の跋文から高志鳳翼に関する多くの事跡はわかった。しかし、その漢文は読みづらい。このことは唐『理傷続断方』も同様である。実際に藺道人自身が書いたかどうかはよくわからない。さらに、この点を深く掘りさげると、まさに宋陳自明『外科精要』[96]（南宋景定四年（1263））自序にあるような内容となる。

> 古（いにしえ）自（よ）り、瘍医（ようい）の一科及び『鬼遺（きい）』[97]等の論（ろん）有（あ）りと雖（いえど）も、後人、深く究（きわ）むる能（あたは）ず。是（ここ）に於ひて此の方、淪没（りんぼつ）し、轉（うた）た乖（もと）り塗（みち）に迷ふ。今、郷井（きょうせい）多（おお）く是れ下甲[98]の人、専（もっぱ）ら此（こ）の科を攻（おさ）むるなり。……蓋（けだ）し医者、精妙に能（よ）く方論を究（きわ）むること有る者少（すく）なし。聞（き）て其の書を讀（よ）み、又（ま）た探賾素（＝索）隱[99]する能はず。病に臨むの際に至るに及びて、倉卒（そうそつ）の間も、病（やまい）に對（たい）し方（ほう）を閲（けみ）し、遍（あまね）く諸薬を試（ため）すこと非（あら）ざる無し。況んや能（よ）く癰疽（ようそ）を療（りょう）し、補割（ほかつ）を持（じ）し、折傷（せっしょう）を理（おさ）め、牙を攻（おさ）め痔を療するは、多く是れ庸俗（ようぞく）にして文理に通（つう）ぜざるの人にして、一たび文の繁（はん）を見）て、即（すな）わち厭棄（えんき）するなり[100]。

と述べているように、古代の医科鍼科より、正骨医のほうが文筆に弱かったことはわかる。おそらく按摩科も同じだと思われる。

### （九）『骨継療治重宝記』の書名について

『骨継療治重宝記』が世に問われた以前に、日本には「正骨医」の名称がなかったため、高志鳳翼はまず、「正骨医来歴論」に、

> 本邦に今、医科は八有り。本来医に十四有りて、脾胃一科廃（すた）れ後（のち）に猶（なお）十三を存（とど）む。『輟耕録』[101]に医科十三科の裡（うち）に傷折一科有り、即ち正骨なり。現今（げんこん）に謂（いわ）ゆる骨継療治、是（こ）れなり。

との解釈を述べている。ここで、元代にあった傷折科は則ち今の正骨である、「正骨」は亦即ち「骨継」という意味である。江戸時代に「傷折科」と「正骨」という呼称がすでにあったことがわかる。

「骨継」という名称は中国の古典には見当たらないが、これに近いのは「骨続」であろう。「骨継」という語は『骨継療治重宝記』に初見となるため、著者の高志鳳翼が造語したと考えられる。

その意味は、「接骨」に通じる。中国においては、唐蔺道人『理傷続断方』には「接骨続筋」、「整骨続筋」という語が見えるため、日本の「接骨」や「整骨」の語源となると考えられる。「正骨」の名称は元代に通用され、「接骨」という呼称は明代に通用していたようである。この影響によるのか、『骨継療治重宝記』では、「正骨」または「接骨」を混用している。

一方、「療治」とは、多くの仏教書籍に見られる語である。たとえば、西晋（265-316年）月氏三藏竺法護訳、『賢劫經』卷第四、順時品第十二には、

> 菩薩の道を行（おこ）ない、一切の三千世界[102]の三毒の病[103]を療治し、最正覺[104]を成（な）し、是（これ）布施[105]の報[106]。

とみえる。「療治」は「治療」と同じ意味である。

「重宝記」という名は江戸時代に諸知識を集めた類書につけられることが多い。当時、流行していた書名である。

### （十）引用した中医正骨に関する書物

『骨継療治重宝記』は初版が延享三年（1746年）に刊行されたため、日本最古の正骨

専門書とみなされている。計３巻あり、上巻の総論、中巻の各論、下巻の薬方で構成されている。現存本は延享三年初版本という原刻本と文化七年（1810年）版本の補刻本の二種類がある。この二種類の版本は正文に大差がないが、補刻本に目録や跋文を追加しただけである。

精査してみると、この書物は基本的に明王肯堂『瘍科証治準繩』（萬暦二十九年（1601））[107]を藍本とし、明代までに刊行された約二十種の中医正骨術に関する専門の書物あるいはその論述がある書物をまとめている。わかりにくい箇所があるが、書名は原書のままにしている。『正骨続断秘方』[108]、『正体類要』[109]、『入門』[110]、『瘍科準繩』[111]、『得効方』[112]、『正骨科』[113]、『袖珍方』[114]、『素問・繆刺論』、『霊枢・厥病論』、『東垣医学発明論』[115]、「張子和」[116]、『玉機微義』[117]、『脉経』[118]、『金匱』[119]、『証治要訣』[120]、『古今医統』[121]、『本事方』[122]、『千金方』[123]、『三因方』[124]、『医林集要』[125]がある。『骨継療治重宝記』はそれらの引用文を記し、まとめたものとみなされる。このことは、明らかに中国正骨医学の影響を決定的に受けていた証左である。しかし、蒲原氏の研究では、17種類の中国古代医学書を引用したと断じている[23]。

『骨継療治重宝記』にはたくさんの挿入図があり、さらに当時、分りやすいようにと仮名表記と漢字を交えて書いている。いまでも多くの版本が残っている。このことは当時、人気があったことを物語る。当時、読み書きができる正骨醫が極めて少ないという時代性を考えると、なぜこの書き方が人気を博したかという理由はわかる。当時の日本では、漢文で医学の専門書を書くのは至極当然のことである。しかし、『骨継療治重宝記』は仮名と漢字を交じえて書く手法により、漢籍の医学専門書を庶民でも読めるようにしたのである。

### （十一）開放性骨折と「六出臼四折骨」

開放性骨折の処置について、『骨継療治重宝記』は全く『理傷続断方』の十四ステップに沿ったものであり、骨折脱臼の分類については、全面的に『世医得効方』の「六出臼四折骨」の理論を忠実に継承している[126]。

中巻において、高志鳳翼は顎関節脱臼を治療する「脱金鉤治法」を紹介している。

> 『三因方』[127]に云う、失欠して頷を脱し、凡そ欠伸（あくび）して頰車[128]を蹉跌[129]し、但（た）だ開くのみにして合する能はざるは、酒を以て飲ませ大いに酔はしめ、睡中に皂角末を吹き、其の鼻を嗃（か）がせ、嚏（くしゃみ）せしむれば、即ち自ら正（ただ）し、と[130]。

この記載は宋陳無擇『三因極一病証方論』（南宋淳熙元年（1174））巻之十六舌病証候〔附失欠〕に録されたものである[131]。

このほか、高志鳳翼は『永類鈐方』（元至順二年（1331））[132]の中の「兜頸坐罌法」と『回回薬方』（明朝洪武年間、1619年?）[133]の中の頸椎牽引復位法[134]に酷似した整復法をも紹介している。

下巻において、高志鳳翼は『瘍科証治準繩』傷損門の中の107通りの方剤をそのまま収録している。その中の13通りは烏頭或いは同類の薬物を含んでいるため、麻酔薬として使用されたのであろう。烏頭が日本漢方の主要な鎮痛麻酔薬物となったのは『骨継療治重宝記』によると思われる[5]。

『骨継療治重宝記』が「整骨麻薬」と「草烏薬」[135]を記載したことで、それ以降の正骨麻酔の発展に大いに貢献をしている。

## 三、『杏蔭斎正骨要訣』

### （一）著書について

この書物は、寛政年間（1789-1800年）に刊行された柔術救急法による外傷性脱臼及び骨折を整復する正骨専門書である[136]。著者吉原元棟について、彼の宗師とされる人物はいわゆる「陳門三浪士」の三浦義辰である。

長崎の外科医兼蘭語通詞である吉雄耕牛[137]は吉原元棟の中国正骨術を非常に賞賛した。長年、自らの優秀な弟子を推薦したため、弟子たちは「門下に委贄（いしつ）し、其術を学ぶを得（委贄門下、得学其術）」で、吉原元棟の門下生となった人数がかなり多かった。『正骨範』著者の二宮彦可はその中の一人であった。勉学した後、吉雄耕牛は弟子たちに理論と実技の両面から吉原元棟の臨床経験と治効症例をまとめることを課した。

四国丸亀藩医の綾含弘と播州龍野藩医の和田鎌堂の二人の校訂作業により、『杏蔭斎正骨要訣』が出版された[138]。『杏蔭斎正骨要訣』は間もなく書肆や外科医、正骨医たちの剽窃または抄襲の対象となった。現存する異本だけでも二十三種に及ぶという[5]。当時におけるこの書物の人気が分かるだろう。

### （二）内容について

『杏蔭斎正骨要訣』は「総論」と「各論」の二つ部分からなっている。

「総論」の「凡例」の中では施術の注意事項を書いている。主要な内容は下記のようになる。

①術前に筋肉緊張と腫脹をなくすため、必ず温罨（おんあん）法を使う。
②手技の整復は三度まで行う。もし依然として成功しなければ、一日置きに再度行うべきである。
③術後、局所に「鶏舌丹」を塗抹したうえ、挟板に包帯で固定する。
④治療戦略を考慮しながら治療のアプローチを講ずる。決して病人に後遺症が残らないように心掛ける。
⑤多発性骨折と脱臼に部位ごとに分けて隔日に整復を行うこと。なぜなら多部位に一回だけ整復することでもどる可能性が低く、かえって疼痛性ショックを起こす可能性が高い。
⑥小児に愛護的な整復手技を実施する。
⑦整復操作の根本原則は牽引、整復と固定にある。

このように、陳元贇から三浦義辰へ、三浦義辰から吉原元棟に伝ってきた中国正骨術の施術原則は、今日の臨床でも大きな指導意義があることがわかる。

### （三）十三種類の正骨手技

下って、骨折と脱臼の各論について、吉原元棟が十三種類の正骨手技を論じている[5]。〔　〕の中が可能な適応症である。

①熊顧[139]術〔頸部捻挫傷、頸椎亜脱臼、鎖骨骨折、肩鎖関節亜脱臼など〕
②風車[140]術〔肩関節脱臼、上腕骨外科頸骨折など〕
③鸞翔[141]術〔肩関節及び肩甲骨周囲損傷など〕
④靡風[142]術〔胸骨骨折、肋骨骨折など〕
⑤鶴跨[143]術〔胸椎以下レベルの脊椎骨折など〕
⑥圓旋[144]術〔肘関節脱臼など〕
⑦遊魚[145]術〔手根関節脱臼、指節間関節脱臼など〕
⑧尺蠖[146]術〔膝関節骨折、膝蓋骨骨折、膝蓋骨脱臼など〕
⑨弄玉[147]術〔足首関節周囲骨損傷など〕
⑩鴒尾[148]術〔中足骨骨折、趾骨骨折など〕

⑪螺旋[149]術〔踵骨骨折など〕

⑫燕尾[150]術〔股関節脱臼など〕

⑬騎龍[151]術〔脊椎骨折、骨盤骨折など〕

上述した治療法はみな具体的な操作方法を紹介する「口訣」を附した。

正骨手技の名称は古代導引法の由来でないかと考えている。

まず、『荘子』外篇、刻意には「吹呴（すいく）呼吸、吐故納新（とこのうしん）、熊経鳥申（ゆうけいちょうしん）するは寿の為（ため）にするのみ。此れ導引の士、形を養ふの人、彭祖（ほうそ）寿考者の好む所なり」[152]とみえる。

『淮南子』精神訓に「吹呴呼吸（すいくこきゅう）、吐故内新（とこのうしん）、熊経鳥伸（ゆうきょうちょうしん）、鳧浴蝯躩（ふよくえんかく）、鴟視虎顧（ししこ）するが若（ごと）きは、是（こ）れ養形の人なり、以て心を滑（みだ）さず」[153]にも相似した記述がある。熊、鳥、鳧（かも）、蝯（てながざる）、鴟（ふくろう）、虎の六種類の動物のポーズを真似た導引の型が示されている。

また、葛洪の『抱朴子』に記載された龍導、虎引、熊経、亀咽、燕飛、蛇屈、鳥伸、天俛、地仰、猿据、兔驚等の名称に似ている[154]。

「華佗五禽戯」と『千金要方』「婆羅門導引十二法」[155]の記載にも類似している。なぜなら、「華佗五禽戯」には虎形、鹿形、熊形、猿形、鳥形の名称があり、「婆羅門導引十二法」には龍引、亀引、麟盤、虎視、鶴挙、鸞趨、鴛翔、熊奮、寒松控雪、冬柏凌風、仙人排天、鳳凰鼓翅の名称もある[156]。

そのうえ、これらの一部の手技は『世医得効方』巻第二十、『孫真人養生書』から取って工夫を加えて付けた可能性もある。要するに、これらの按摩正骨手法の名称は、そもそも陳元贇が当時の中国の按摩または推拿手技のそのものを導入したものと考えた方が理に合う。逆に陳元贇あるいは吉原元棟あるいは吉雄耕牛の医学生弟子たちが命名したものではなかろうと考えている。

もしもこの推測が成立することが可能であれば、筆者は、現行の正骨按摩推拿手技のほかに、中国国内のいずれかの文献に現れなかった手技が存在していると確信するようになる。この類いの手技は恐らく明代に日本に導入され、日本古代正骨医また按摩医たちが記録して、日本語の正骨専門書または按摩専門書として流布して今日まで至った可能性が大である。

## 四、『正骨範』

### （一）二宮彦可について

二宮彦可（宝暦四年（1754）～文政十年（1827））は、遠州浜松[157]在叟楽村瘍科医、国学者小篠敏（おざさみぬ）の家の長男として生まれた。本名は小篠であった。十四歳の時に岡崎藩の口中医二宮家の養子となった。字は彦可、齢文、齢順、号擁鼻、叟楽、叟楽老人となり、諱は献であった。

幼い時に、梅毒を罹患した乳母の哺乳のせいで梅毒感染を受け、顔貌には眉睫堕落と鼻柱崩壊となった。故に成人後、自号を「擁鼻」と称し、ユーモアを以て、心中の鬱憤を解いていたらしい。このため、文化五年（1808年）に刊行した『正骨範』初版本は「擁鼻蔵本」と呼ばれているわけである。

二宮彦可は顔貌醜陋だが、超人的な天資の持ち主であった。十九歳の時に口中科を修め、さらに各地の名医や碩儒に内科、眼科、漢方、蘭方を習得した[158]。彼は、漢文とオランダ文に精通しただけでなく、系統的に中国医学、日本漢方医学とオランダ医学を掌握した。彼は西洋医学の外科手術法をマスターしたうえ、師の吉雄耕牛の付託を受け、正骨宗師吉原元棟に従事して、中国正骨術を習得した。長男の二宮齢脩は華岡正骨流派の門人となった。

二宮彦可は1791年に浜田藩藩侯の侍医となった。1793年に藩侯の「参勤交代」[159]に伴って、江戸城に移住した。そこで吉原元棟の正骨術を「漢蘭和折衷」の角度から考察し、『正骨範』を書きあげた。1807年に完稿して、翌年（1808年）に刊行した。その時は、ちょうど五十四歳であった。この本の序文に幕府医学館漢方大師多紀元簡[160]と幕府西洋外科医官蘭方専科桂川国瑞[161]の推薦文があるため、『正骨範』が高い学術的評価を得ていたことがわかる。

### （二）『正骨範』と「正骨心法要旨」

漢文で書かれた『正骨範』は上下乾坤の二巻に分かれ、書末に正骨経験方が付録として付けられている。上巻の「乾之巻」は完全に『医宗金鑑』正骨心法要旨の行文体例を模倣している。目次は「接骨総論」、「検骨」、「脈診治法」、「十不治証」、「敷薬法」、「薬熨法」、「熨斗烙法」、「鏝熨法」、「振梃法」、「腰柱法」、「杉籬法」、「裹簾（かれん）法」等各章に分かれている。

「検骨篇」には全身にある三十八個の骨の部位及び各々の損傷後の症候と治法を記載した。作者はオランダ医学の解剖学知識に基づいてこれらの骨を描写したが、それら

の名称は完全に『医宗金鑑』正骨心法要旨に因んでいた。さらに中医傷骨学の「全身三百六十五個骨あり」の理論を採用した。列出した三十八個の骨は、「正骨心法要旨」の中の四十六個骨に比べ、八個少なかった。

一方、「薬熨法」、「熨斗烙法」、「鏝熨法」、「振梃法」、「腰柱法」、「杉籬法」に関する記載も『医宗金鑑』正骨心法要旨によるものばかりである。両者を比べると、『正骨範』では「披肩」、「攀索」、「叠磚」、「通木」、「報膝」等の正骨固定器具に関する内容が省略されている。代わりに、「裹簾法」にはオランダ医学の白布包帯固定法と十八枚の説明挿入図を収載していた。その理由は、恐らく二宮彦可が正骨医兼外科医、口中医なので、骨折脱臼固定法に『医宗金鑑』正骨心法要旨の裹簾法をすんなり採用せず、かえってオランダ医学の白布包帯法を使用したことにあるかもしれない。

### （三）『正骨範』がなした工夫

よく考えてみると、日本の江戸時代（1603～1867年）といえば、明、万暦三十一年から清、同治六年の時期となるが、江戸中期の1720年（享保五年）には、八代将軍吉宗[162]の洋書禁制が緩和され、西洋文化の移入との政策をとった。二宮彦可が実利、実効、実用、実学という原則を遵守しながら、「漢蘭折衷」に着眼して取捨を行った。つまり、漢（中国）から中医薬の方剤と正骨手技を取り、蘭（オランダ）から近代解剖学知識と包帯法を取り、さらに和（日本）の固有の正骨法と融合して、新しい正骨術を見出したわけである。

二宮彦可はその宗師吉原元棟の『杏蔭斎正骨要訣』を基礎にして、『正骨範』に「探珠[163]法」[164]と「躍魚[165]法」[166]を加えた。また、「風車術」[167]を「車転法」に改名した。この種の復位法は急性肩関節前方脱臼の牽引回旋法（Kocher 法）に非常に似ている（表１『正骨範』が収載した正骨手技名一覧）。

表１　『正骨範』が収載した正骨手技名一覧

| 正骨手技名 |
| --- |
| 探珠母法、探珠子法；熊顧母法、熊顧子法第一、熊顧子法第二、熊顧子法第三；車転母法、車転子法第一、車転子法第二、車転子法第三、車転子法第四、車転子法第五、車転子法第六、車転子法第七、車転子法第八；圓旋母法、圓旋子法第一、圓旋子法第二、圓旋子法第三、圓旋子法第四；躍魚法；遊魚法；鸞翔法；靡風母法、靡風子法第一、靡風子法第二、靡風子法第三；鶴跨母法、鶴跨子法；騎龍母法、騎龍子法；燕尾母法、燕尾子法第一、燕尾子法第二；尺蠖母法、尺蠖子法第一、尺蠖子法第二、尺蠖子法第三；弄玉法；螺旋法；鴒尾法。 |

＊下線者：母法

しかし、『正骨範』の中に列出した「燕尾法」[168]は『杏蔭斎正骨要訣』が述べたように、股関節脱臼を前方型と後方型を分けなかった。これは師資相承の学といえる。この点だけは瑕疵かもしれない。『骨継療治重宝記』に比べ、後退したようである。なぜなら、『骨継療治重宝記』はすでに唐蘭道人『仙授理傷続断秘方』と元危亦林『世医得効方』に基づいて股関節脱臼の方向性による異なる整復手技を書いていたからである。

ところで、二宮彦可が描述した陳元贇による伝授、三浦義辰・吉原元棟による伝承した中国正骨術の理論根拠は『医宗金鑑』正骨心法要旨にある。

『正骨範』丹波元簡の序に曰く、

> 其の法、『聖済総録』、『証治（準縄）』の諸書に載す。近世の『医宗金鑑』に載する所の摸、接、端、提、按、摩、推、拿の八法、是（こ）れ予（われ）の所謂、別に其の治を得る者なり。唯だ其の法、未だ精細を得ざるを恨（うら）むのみ[169]。

と書いている。

『医宗金鑑』正骨心法要旨、手法釋義に載っている、いわゆる「正骨八法」は、詳しく書いていなかったが、『正骨範』のほうが各種の正骨手技の操作順序を非常に詳細に載せているうえ、さらに数十枚の挿入図も入れている。このことについては正に二宮彦可が『正骨範』接骨総論に次のように述べている。

> 今、『金鑑』八法を以て経と為し、新（あら）たに母法十五、子法三十六を立て以て緯と為す。凡そ三百六十五節の傷損は、此の手法より逃るる所（ところ）無し[170]。

陳元贇が伝授した、三浦義辰・吉原元棟が伝承した中国正骨術に対して、二宮彦可がこれを具現化、可視化及び規範化という煩雑な作業を行った。これにより、正真正銘の中国正骨術の保存と発展に絶大な貢献をしたことは間違いがない。

二宮彦可は書中に吉原元棟の百五十種類揉法について言及している。しかし、具体的な記載はない。このいわゆる百五十種揉法はおそらく按摩推拿手技を含んでいると思われる。その種類の多さに驚かされる。

### （四）正骨経験方について

表２　『正骨範』が収載した正骨経験方剤一覧

| 分部 | 処方数 | 処方名称 |
|---|---|---|
| 1. 麻薬部 | 3 | 整骨麻薬、九鳥散、草烏散 |
| 2. 熨薬部 | 8 | 艾腸泥、黄酒散、蒲黄散、馬鞭散、定痛散、熨烙泥、国寿散、洎夫藍湯 |
| 3. 膏薬部 | 2 | 蚯蚓膏、莞爾膏 |
| 4. 敷薬部 | 20 | 一白散、鯽魚泥、生鱒泥、茴香酒、鶏舌丹、翻風散、救急奇方、黒龍散、赤地利散、楊梅散、仮母布刺酒、琥珀散、無名散、玳瑁光、生鱸泥、麟血散、青泥、綴薬、消毒定痛散、麻肌散 |
| 5. 洗薬部 | 3 | 散瘀和傷湯、蒴藋煎、片脳水 |
| 6. 丸薬部 | 13 | 鶏鳴散、当帰導帯散、奪命散、八厘散、黒薬方、当合丸、疏血丸、塞鼻丹、回陽玉龍丸、六味地黄丸、蘇合香丸、鷲霜散、黒神散 |
| 7. 湯薬部 | 17 | 復元活血湯、斂血剤、清上瘀血湯、清下破血湯、正骨順気湯、赤地利湯、鱉魚湯、加減蘇子桃仁湯、犀角地黄湯、桃仁承気湯、抵当湯、調経散、折傷木湯、四物湯、百合散、加減承気湯、玉燭散 |

表２に示すように、二宮彦可『正骨範』「正骨経験方」の中で、「麻薬部」、「熨薬部」、「膏薬部」、「敷薬部」、「洗薬部」、「丸薬部」と「湯薬部」という七部を設け、共六十六通方剤を収載していた（表２『正骨範』が収載した正骨経験方剤一覧）。『杏蔭斎正骨要訣』に収載していた二通貴重な方剤をも載っている。多くの方剤は『正骨範』に初見となる。たとえば、藺道人『理傷続断方』、高志鳳翼『骨継療治重宝記』と同じ、書中には、中国中原以外の場所に原産地となる薬が多数存在することに非常に気になる。たとえば、「熨薬部」の中に洎夫藍湯というのはその一例である。洎夫藍の和訳別名は薬用サフランで、中医薬では番紅花という。

『欽定四庫全書』『御定佩文斎広羣芳譜』巻八十九、卉譜、紅花では、

> 原紅花、一名、紅藍、一名、黄藍･･･番紅花、一名、洎夫藍、一名、撒法。即ち西番回回の地面及び天方[171]国に出（い）づ[172]。

とみえる。

また、明李時珍『本草綱目』草四、番紅花には、

> 番紅花、西番回回の地面及び天方国に出（い）づ。即ち彼地の紅藍花なり。元の時以て食饌に入り用ゆ[173]。

とある。洎夫藍はチベット、西域、中央アジア、ないしアラビアの地域の産物であることはわかる。いまでも中医薬以外に、香辛料としても使用されており、むしろ、後者のほうが有名であろう。ここで、中国の傷骨分野形成期において、何らかの形で西域からの影響を受けていたかもしれないことがわかる。これは新しい研究課題となるだろう。

ほかの医書に見られる同名の方剤も載せられている。たとえば、「敷薬部」の一白散は『古今医鑑』（万暦四年（1576））をもととしている（組成、生明礬）、『瘍医準繩』（万暦三十六年頃（1608頃））巻六には、組成が半夏だけとなる。『正骨範』では、組成は百草霜、飛羅麺、生姜汁となっている。同名であるが、大きく方剤の組成が変わった。この方面の研究は薬物研究の範疇となる。

### （五）派生された画軸『正骨原』の継承性

長崎大学付属図書館には、『正骨原』という画軸が公開されている。説明文によれば、『正骨範』の著者二宮彦可の養嗣子、二宮督が右香斎という画家に描かせたものである。探珠二図、熊顧、靡風、燕旋、螺旋、車転、圓旋、騎龍、弄玉、鴿尾、游魚、鶴跨、尺蠖の各一図、計十六図がある。人物の服装は『正骨範』と比べると、中国風のものでなく、江戸の文政（1818年～1831年）・天保（1831年～1845年）年間のものであるという[174]。

この画軸の誕生したころは、中医骨傷科理論実践体系が日本の古代正骨術に及ぼした影響が徐々に弱くなりつつある時期であったと思われる。二宮彦可の『正骨範』は陳元贇、三浦義辰、吉原元棟を通して、中国按摩正骨術を継承して、日本の正骨術の形成につながり、まさに承前啓後のような中継ぎ役割を果たしていると考えられる。

## 五、小結

江戸時代に中国傷骨科医学体系の影響を受けて誕生した正骨専門書がある。すなわち高志鳳翼『骨継療治重宝記』（延享三年、1746年）、吉原元棟『杏蔭斎正骨要訣』（天明九年、寛政元年）1789～（寛政十二年）1800年）、二宮彦可『正骨範』（文化五年）1808年）のことである。日本側では、上記の三冊の正骨の専門書に対して、多くの研究が行われてきたが、陳元贇との関わりや彼の貢献度に関する報告はあまり見あたらない。中国側では、書籍の紹介や出版の段階に留まり、それぞれの著者が、多くの中国骨傷科の書物からどのような影響を受けているか、どのような人物により実技を導入したかについて、深く探った論文はない。こうした先行研究を踏まえ、三冊の江戸期正骨の専門書

がいかにして中国古代按摩整骨術や傷骨科理論体系を導入したかについて検証することを拙稿の研究目的とした。

『骨継療治重宝記』には、序文、跋文、自辞がある。これらの史料を解読して、はじめて高志鳳翼という人物の輪郭を描写できた。彼は僧侶の一員であり、また僧医または看病僧であることを考証した。また、唐蘭道人『理傷続断方』の著者は僧の可能性があり、明異遠真人『跌損妙方』の著者も僧であることを指摘した。

「骨継」という語は『骨継療治重宝記』に初見となるため、著者の高志鳳翼が造語したと考えられる。

高志鳳翼の『骨継療治重宝記』と吉原元棟の『杏蔭斎正骨要訣』は正骨技術と方法を構築した。中国正骨術の施術原則は陳元贇から三浦義辰へ、三浦義辰から吉原元棟に伝わってきた。吉原元棟に言及された按摩正骨手法の名称は、そもそも陳元贇が当時の中国の按摩または推拿手技のそのものを導入したものとしたほうが理に合うと考えている。

一方、二宮彦可の『正骨範』は「漢蘭和折衷」の正骨術をきちんとした医術専科にした。日本の医学史によれば、明治三十九年（1906年）にドイツの医療教育体系を真似て外科から派生して、整形外科は独立した科目となった。日本整形外科史を縦覧すると、高志鳳翼の『骨継療治重宝記』、吉原元棟の『杏蔭斎正骨要訣』及び二宮彦可の『正骨範』は同時に、伝統医学範疇に属する柔道整復療法と、現代医学領域に属する整形外科の学術理論の礎を構築している。日本の整形外科の早期形成段階において中医骨傷科理論実践体系の影響を受けたことは確かである[175]。

## 註釈と参考文献

1　701～757年。

2　江戸時代：1603～1867年。江戸時代中期は、一般に1716年から1853年までの間とされている。

3　中山清『解説骨継療治重宝記』抄写本、計上・中・下三巻と付録ある。(『柔道整復全書』第２冊、太陽堂（東京)、1961年。

4　1568～1603年。

5　蒲原宏「日本の近代整形外科が生まれまで――１．先史社会から中世まで」整形外科、13（1)：64-69，1962

6　蒲原宏「日本の近代整形外科が生まれまで――２．封建社会成長期」整形外科、13（2)：151-155，1962

7　蒲原宏「解題・年表――日本整形外科前史」(『整骨・整形外科典籍大系１』オリエント出版社（大阪)、1984年。

8　陶恵寧「「正骨範」から見た江戸時代の整骨方法」日本医史学雑誌、45（2)：28-285､1999。「正骨範」の書名号はそのままにしている。文中にある「振挺法」は「振梃法」の誤写と考えられる。

9　山本徳子「江戸期の接骨整骨専門書――『正骨範』をめぐって」医道の日本､656号：165-171、1999

10　成高雅「中国正骨術の日本的受容――『骨継療治重宝記』を手がかりに――」歴史文化社会論講座紀要、15：17-37、2018

11　海老名大五朗「柔道整復師はどのようにしてその名をえたか」スポーツ社会研究、20（2)：51-63、2012

12　尚天裕『中国骨傷科学』(巻七、骨折與関節脱位)、广西科学技术出版社、４頁、1989

13　尚天裕『中国接骨学』天津科学技术出版社、６頁、1995

14　陳存仁（1908～1990年)、上海に生まれ、上海名医丁甘仁がつくった「上海中医専修学校」に卒業され、史上「三一七国医抗争運動」の発起人の一人である。後期に中医師として香港に開業した。1935年、二百三十万の『中国薬学大辞典』を主編した。1937年、『皇漢医学叢書』を編集し、系統的に日本漢方書籍を蒐集して、刊行した。1979年、日本講談社の要請に応じ、『中国薬学大典』を編纂した。米国で亡くなった。

15　眞柳誠「中国に於いて出版された日本漢方関係書籍の年代別目録（1)」「同（2)」漢方の臨床、30巻９号47-51頁・同10号32-41頁、1983年９月・10月（2004、７、2011、２改訂）

16　李盛鐸（1859～1937年）は清末民初の政治家、外交官、蔵書家。字は椒微、号は木斎。

17　李強「『正骨範』乎？『正骨范』乎？」中医文献雑誌、(6）31-32、2010

18　李強「日本接骨専著『正骨範（中国接骨圖説)』的学術淵源及其対日本柔道整復界的影響」中医正骨、22（6)：20-23、2010

19　韋以宗『中国骨科技術史』上海科学技術文献出版社、1983年

20　韋以宗『中国整脊学』人民衛生出版社、18頁、2005年

21　本章は拙著 李強「三種日本江戸時代正骨専著及其学術要点」中国骨傷、24（1)：779-784、2011　をもとに、大幅に加筆修正したものである。

22　古代の摂津国の範囲は、概ね現在の大阪府の一部および兵庫県南東部に当る。

23　蒲原宏「日本の近代整形外科が生まれまで――― 3．近世における前整形外科的治療の実態」整形外科、13（3）：241-247，1962

24　穂積以貫の『難波土産』に「大坂をなにはといふ事」（『新群書類従』國書刊行會、第６冊、336頁、1906-1908年）とみえる。

25　穂積以貫（ほづみいかん）（元禄５（1692）～明和６（1769）年）。江戸中期の儒学者。通称は伊助、号は能改斎である。伊藤東涯の門下で、大坂に塾を開いた。著書には『難波土産』などがある。

26　『論語』雍也第六に「斯人也、而有斯疾也」とみえる。

27　「就中」は、ふつう、「なかんづく」と読むが、この部分の訓点が「中に就きて」であるので、それに従った。

28　「青嚢」のことばは『晋書』にある。「郭璞傳」：「有郭公者、客居河東、精於卜筮。璞従之受業、公以青嚢中書九卷與之、由是遂洞五行、天文、卜筮之術。」ここの青嚢は秘傳の書を比喩している。秘傳の医書という意味にしたのは、唐劉禹錫『閑坐憶楽天経詩問酒熟未』「案頭開縹帙、肘後檢青嚢。唯有達生理、應無治老方」とみえる。また、『三国演義』第七十八回に「「華佗在獄、有一獄卒、姓呉、人皆称為呉押獄。此人毎日以酒食供奉華佗。佗感其恩、乃告曰、〔我今将死、恨有青嚢書、未傳於世。感公厚意、無可為報。我修一書、公可遣人送與我家、取青嚢書来贈公、以継吾術〕」ともみえる。

29　明邵以正の著書には『青嚢雑纂』という名の書物がみえる。邵以正（1368-1463年）、承康子を号とし、別号は止止道人となる。雲南の人だが、祖籍は蘇州にあった。明英宗正統（1436-1449年）年間の中、「左正一」に昇格し、京師の「道教事」を領した。

30　「夙志古学来家塾、而執経問難、孜孜不休、茹古含今、知博才達。千里駒者、其在斯人。與嚼又耽醫學、済人許多就中。憫夫刃傷打撲墜堕等項、過虧支體者原乎。青嚢襍纂中、所載正骨續斷方為一書、将以弘于世、名曰骨継療治重宝記。遂問序于予、予素不諳其術、何足為軒輊耶。唯嘉其憂世之志、或近乎仁也。為附一辞于卷首云。延享乙丑年春三月　穂積以貫伊助叙。」

31　江戸期において、浪華を代表する寛文年間（1661～1673年）の漢方名医である古林見宣の後人である。古林見宣の墓所は大阪の禅林寺にあり、古林見宣堂の宅跡は現在の大阪市中央区粉川町にある。

32　中国古代哲学では、自然界の中の六種類の氣候變化の現象、陰・陽・風・雨・晦・明を指している。『左傳』昭公元年に「天有六氣、降生五味」とあり、『荘子』逍遙遊篇に「若夫乗天地之正、而御六氣之辯」とみえる。

33　人体に障害を与えるような気候変化を六淫といい、風邪・寒邪・暑邪・湿邪・燥邪・火邪がある。

34　人間がもっている七種類の感情のこと。『禮記』禮運では、喜・怒・哀・懼く・愛・悪・欲となる。中医学では、喜・怒・憂・思・悲・恐・驚となる。

35　中薬または漢方薬の薬性は薬物の性能と効果を指している。

36　四氣のこと。または「四性」とも称される。薬物に本来、寒・熱・温・涼の四種類の性質を意味する。

37　辛、甘、酸、苦、鹹の五種の味のこと。

38　金張子和『儒門事親』巻一に初出となる中医術語である。「方有七、剤有十。七方者：大、小、緩、急、奇、偶、復也。十剤者：宣、通、補、泄、軽、重、滑、渋、燥、湿也。」

39　中医学では、榮が血のめぐりを、衛が氣の流れを意味している。

40　『論語』子路には、「人而無恒、不可以作巫醫」とみえる。邢昺『十三経注疏』に：「巫主接神去邪、醫注療病」があるから、巫と医は別の役割を果たしていたことが明確であろう。「毉」と「醫」とはともに聲旁が同じく【殹】となり、義旁からみれば、【酉】あるいは【巫】に従う。前者が巫術を使って病人治すと、後者はと酒を使って病人を治療するとわかる。大形徹「醫について」漢字學研究、第７号：79-91頁、2019　を参考すべきである。

41　摂津国のことである。現在の大阪府北中部の大半と兵庫県南東部にあたる。

42　『漢書』巻六五、東方朔傳に「今世之處士、魁然無徒、廓然獨居、上觀許由、下察接輿、計同范蠡、忠合子胥。」とみえる。また「處子」ともよばれる。

43　前掲のように、見宜堂（けんぎどう）は古林見宣に関係ある。秋里籬島著、竹原春朝斎ほか画の『摂津名所図会』巻四：「医生見宜堂（いせいけんぎどう）　聚楽町にあり。寛文の頃の名医にそて、立庵（りゆうあん）と号し、黄檗山隠元和尚を友とし、その頃所司代板倉周防守殿大坂兼帯なれば、その挙によって、後水尾帝の天脈（てんみゃく）を候（うかが）ふ。　境地に見宜堂あり。額は隠元書す。堂前の石灯炉は雲竜の模形（もぎょう）ありて唐物なり。家に城代阿部備中侯・板倉周防侯の書翰多し。今において浪華の名医にして、家方の錦袋子（きんたいし）世に名高し」とみえる。

44　「夫天有六氣、人有六淫七情、相侵而衆疾成焉。蓋病有標本緩急、症有寒熱虚實、由是察脈証而布能治。詳薬性氣味而七方十劑、随其宜陰陽榮衛、理其元矣。若自非熟學研究、何明至察知病療之可否哉。是實毉大本領也。雖然又不感傷六氣七情、而有罹不虞之患、蒙折傷者最宜哀傷焉。治是之術、行於吾方者有年矣、而未有鏤梓者。

今也高志氏詳其述而書、以國字附剞劂。氏将廣於世、可謂仁厚也。僕雖不知其人、予友来索、書其後不能固辭、而以跋云。延享丙寅年仲秋　攝城處士古林〔泰〕武正書見宜堂。」

45 「緇林」の出自は『荘子』漁父に「孔子遊乎緇帷之林、休坐乎杏壇之上」にある。多くの僧があつまる所、または寺院を意味する。

46 「デジタル大辞泉」によれば、「徳の高い僧を竜と象にたとえた語」とみえる。唐王勃『四分律宗記』序に「二邊雲徹、方知實相之尊。十刹風行、乃識真如之貴。將使龍象緇服、維明克允。」

47 「剥啄誰叩門、門外有佳客。」宋兪德隣閒居遣懐三首、其一より。上の「朝昏」と一緒に読むと、朝晩に患者さんが診療所のドアを叩くことを指しているであろう。

48 局▼の文字は咼と同じ。咼は、くちいがむ、と訓ず。しかし、そのままでは意味が通じにくい。あるいは、「局」の異体字ではないだろうか。それだと、「かがまる」と訓むことができる。

49 元代を始め、明隆慶５年まで、太医院は十三科に分けられていた。拙文（「明代隆慶五年廃止太医院按摩科的原因探析」中華医史雑誌、42：３－７、2012）に言及した。

50 仏教では、仏典を「内」、仏教と関係のない経典を「外」としている。

51 「大抵病證雖具四百四病名目、及見千万之證候、而畢竟不出気血之二。……本邦諳此術者、寥寥無聞焉。蓋如吾鳳翼君、則緇林龍象、豎門之泰斗。朝昏剥啄、求治者尤夥、戸外履満、世醫滔滔局一科、先生以好古博識徧該十三科、最可謂精到乎。豎、術者哉。且余従先生受教導上下経義、期孜孜不倦。先生雖未其齢三十、最精内典、于儒于醫、旁及諸子百家。覃思研精、著書既満篋笥、就中此書。急救不虞之損傷者以故頃日、許坊人之懇求梓焉」」

52 前掲〔40〕、大形徹「醫について」漢字學研究、第７号：79-91頁、2019　を参考してもよい。

53 『大辞林』第３版によれば、「仏教で、人間のかかる病気のすべて。 人身は地・水・火・風の和合から成り、その調和のないときそれぞれに百〇一種の、合計四百四の病が生ずるという。」

54 華佗（かだ）（110～207年）。後漢末期時代の傑出した医学者である。手術に関する伝説は『三國志』「魏書二十九、華佗傳」に記載されている：「病若在腸中、便斷腸湔洗、縫腹膏摩、四五日差。不痛、人亦不自寤。一月之間、即平復矣。」

55 語の出自は『南史』「薛伯宗傳」にある：「時又有薛伯宗善徙癰疽、公孫泰患背、伯宗為氣封之、徙置齋前柳樹上。明旦癰消、樹邊便起一瘤如拳大。」薛伯宗は南北朝

時期の「神醫」とみられる人物である。

56 『詩経』「衛風、淇奥」に「有匪君子、如切如瑳、如琢如磨」とみえる。

57 「蕩蕩」という語源は『論語』「泰伯」にみえる：「蕩蕩乎民無能名焉、巍巍乎其有成功也。」

58 「熙熙」の語源は『老子道徳経』「第二十章」にある：「眾人熙熙、如享太牢、如春登台。」また、『《漢書》「禮樂志」に「眾庶熙熙、施及夭胎、羣生嘻嘻、唯春之祺。」顔師古注：「熙熙、和樂貌也。」唐代の张生『夢舜撫琴歌梦舜抚琴歌』にある：「南風薫薫兮草芊芊、妙有之音兮歸清弦。蕩蕩之教兮由自然、熙熙之化兮吾道全、薫薫兮思何傳。」また、明初の戸部尚書の夏原吉（1366～1430年）の「聖德瑞應詩」に、「蕩蕩三邊肅、熙熙兆姓娱」とみえる。

59 唐慧然『鎮州臨済慧照禅師語録』に「僧云：如何是人境俱不奪？師云：王登寶殿、野老謳歌」とある。「野老」は農夫を指す。

60 仏教の典籍を内典という。唐道宣が撰した『大唐内典録』がある。

61 儒家經籍である。『左傳』「哀公二十一年」に「魯人之皋、數年不覺、使我高蹈。唯其儒書、以為二國憂」とある。

62 春秋戦国時代における各派の學者或彼らの著作を指す。『漢書』「藝文志」：「戰國從衡、真偽分爭、諸子之言、紛然殽亂。」

63 春秋戦国時代における各学派を指す。『荀子』「解蔽」：「今諸侯異政、百家異說、則必或是或非、或治或亂。」『史記』「滑稽列傳」：「今子大夫修先王之術、慕聖人之義、諷誦詩書、百家之言、不可勝數。」

64 五経以外の諸書を指す。漢荀悦『申鑑』「政体」：「夫道之本、仁義而已矣。五典以経之、群籍以緯之。」また、『晋書』「阮籍傳」：「博覧群籍、尤好荘老。」

65 「五車」とは『荘子』「天下」に「惠施多方、其書五車。其道外駁、其言也不中」にみえる。五輌の車に乗るほどの大量の書物を意味している。

66 昼と夜。唐杜甫『九日寄岑參』：「沈吟坐西軒、飯食錯昏晝。」

67 悟る様子。北斉顔之推『顔氏家訓』「勉学」に「積年凝滯，豁然霧解。」とある。

68 自ら心を得た様子。『礼記』「中庸」に「君子無入而不自得焉」とある。

69 簡單で明白なこと。宋朱熹『朱子語類』「卷四」に「恐孟子見得人性同處、自是分曉直截、卻於這些子未甚察。」

70 出版刊行を業とする商売人。清李漁『閑情偶寄』「詞曲部、賓白」：「每成一劇、才落毫端、即為坊人攫去。下半猶未脫稿、上半業已災梨。」

71 古代には、梨木或いは棗木を版に刻むのが多いから、故に「梨棗」を以て書版の代

稱となる。清方文『贈毛卓人學博』:「虞山汲古閣、梨棗燦春雲。」

72　永存の意。『左傳』「襄公二十四年:「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽。」

73　『康熙字典』「日部」皆:「說文:古文時字。從之（屮）日。楚辭九章:聊假日以須皆。補注:皆、古時字。」また、古代には、ゆっくりと歩くことを意味していた。『爾雅』:「室中謂之皆、堂上謂之行、堂下謂之步、門外謂之趨、中庭謂之走、大路謂之奔、析言之也。」

74　「華佗縫腹、伯宗徙癰、奇法神術、医家之宗。本邦文明、学相琢磨、蕩蕩熙熙、野老謳歌。内典儒書、諸子百家、群籍梓行、堆稜五車。正體之書、無開昏晝、此於醫術、非欠闕乎。偶有一書、正骨秘論、熟読之久、深達其意。豁然自得、乃著鄙説、一求易通、最要直截。坊人請梓、其意惟厚、速登梨棗、以垂不朽。　皆　延享丙寅年春正月穀旦 攝陽國難波邑 高志心海撰並書。」

75　経書と史書のこと。

76　「壽」は文脈より梓の木（版木）に文字を彫る意味と解した。

77　大僧正とは、僧綱（そうごう）の最高位、僧正の上位の職である。

78　生卒:668～749年。奈良時代の日本の僧。功績により東大寺の「四聖」の一人に数えられている。生地は河内国（後和泉国）大鳥郡（現・大阪府堺市）である。大鳥はまた鳳とも書く。高志心海の號は鳳翼であるため、何か関係あるかに興味深い。吉田靖雄『行基と律令国家』吉川弘文館〈古代史研究選書〉、1987年

79　能化（のうげ、のうけ）、僧侶の長老級人物にしか使わない仏教用語。

80　『詩經』周南、漢廣に「翹翹錯薪、言刈其楚」とみえる。特に傑出した人才を例えるときに使われる。

81　助行とは助業ともいう。念仏を助ける行のことである。

82　「鳳翼君名心海字玄登、攝州難波邑產也。少好學、壯而飫經史、博涉諸家襍説、旁探百氏奥牒、且又耽醫術、而最究正骨続筋之薀、經驗頗夥。近又得一書、名理傷続断秘方者、乃世所希獲、而時醫所難觀者。其於正骨之方略究精詳、公據其方、且参攷祖先及異人所授秘冊中所載要方。沙之汰之、断以已意。遂成一帙、命曰骨継療治重宝記。学者苟能周覧之、則正骨整頓之手法、関節筋絡之機要。以至用薬處方之意旨。不待徧閲諸書、莫不瞭然、于心胸之間、其功不亦大乎。今茲正業已成。而将壽之梓。命跋于予。予欣然嘉乎。公泛施惠、海内遐垂裕萬世之仁心。為附鄙言、于尾張矣。謹考先生之系譜、心海貴師號鳳翼、本系婆羅門。姓者高志、而大僧正行基菩薩之後胤也。基公者本邦之能化、而世姓高志、由是姓高志、而南天竺婆羅門志阿彌

法師之苗裔也、繇此亦姓婆羅門。烏虖先生者卓乎、緇林之翹楚、而以醫之明為助行最精内典云。」

83 明治になると神仏分離により神鳳寺は廃寺となったが、大鳥神社の方が免れた。筆者の大学研究室から大鳥神社がみえる。

84 字伯原、吳郡の人。

85 渤海国（698-926年）は、現中国東北部から朝鮮半島北部、現ロシアの沿海地方にかけてかつて存在して、契丹（遼）によって滅ぼされた国だった。

86 「高志宜、渤海人。同官尉、氣尙古風、力加能事。」

87 第四輯、579-581頁。国立国会図書館デジタルコレクションにも収載されている。

88 「僧正諱菩提仙那。姓婆羅遲、婆羅門種也。」

89 多治比広成（たじひ の ひろなり）は、飛鳥～奈良時代の従三位・中納言・漢詩人。第10次遣唐使の大使に任ぜられ、天平５年（733年）４月に難波津から唐に向けて出発、天平６年（734年）11月に唐から種子島に無事帰着するという。

90 林邑国の所在について、諸説がある。大西和彦が中部ベトナムに栄えたチャンパー王国（192-1832年）の林邑国時代（192-756年）を研究している。大西和彦が「日越交流における林邑僧仏哲の事跡」Cham Studies、Nov. 2015にて「日本に渡来した林邑僧仏哲が伝えたチャンパーの舞踊は林邑楽として今日まで雅楽の中に伝承されている」という。また、『隋書』巻八十二、列伝第四十七、林邑伝に「人皆奉仏、文字同天竺」とみえる。

91 「跨雪峰而進影。泛雲海而飛儀。冒險經遠。遂到大唐。唐國道俗。仰其徽猷。崇敬甚厚。於時聖朝通好。發使唐國。使人丹治比真人廣成。學問僧理鏡。仰其芳譽。要請東歸。僧正感其懇志。無所辭請。以大唐開元十八年十二月十三日。與同伴林邑僧佛徹。唐國僧道璇。隨船泛海。及於中路。忽遭暴風。波濤注日。陰噎迷天。計命忽若贅旒。去死猶其一分。舉船惶遽。不知所為。乃端仰一心。入禪觀佛。少選之間。風定波息。眾咸歎其奇異。以天平八年五月十八日。得到筑紫大宰府。昔騰蘭聿來。澄什利往。停跡振旦之邦。未躡日域之境。計遠論勞。彼有愧德。自非位超修成行積永劫。其孰契於茲乎。同年八月八日。到於攝津國治下。」

92 『国昌寺文書旧記録』より。

93 新村拓『日本仏教の医療史』法制大学出版局（東京）、230-232頁、2013年

94 服部敏良『平安時代医学の研究』桑名文星堂（京都）、45頁、1956年。

95 富士川游『日本医学史』118-120頁、真理社（東京）、1946年

96 宋陳自明撰、三巻、六十篇、外科の専門書である。

97　晋劉涓子『劉涓子鬼遺方』、外科の専門書である。後に南斉の永元元年（499年）に龔慶宣により再編された。

98　科挙の進士殿試の成績は第三等の人を下甲人という。『金史』選挙志二に、「女直進士。大定十三年、皆除教授。二十二年、上甲第二第三人初除上簿、中甲則除中簿、下甲則除下簿。」

99　『易』繫辞伝に「探賾索隠、鉤深致遠」とみえる。索隠とは、隠れているものを求めること。

100「自古雖有瘍醫一科、及鬼遺等論、後人不能深究、於是此方淪没、轉乖迷塗。今鄉井多是下甲人、專攻此科。……蓋醫者少有精妙能究方論者。聞讀其書、又不能探賾素隱、及至臨病之際、倉卒之間、無非對病閲方、遍試諸薬。況能療癰疽、持補割、理折傷、攻牙療痔、多是庸俗不通文理之人、一見文繁、即使厭棄。」

101『南村輟耕録』（1366年）のことで、元陶宗儀（南村を号とした）が書いた随筆である。30巻がある。

102『朝日新聞・ブリタニカ国際大百科事典』に「仏教用語。三千大千世界の略称。仏教の宇宙観によると、一世界とは須弥山を中心として九山八海、四洲（四天下）や日月などを合したものであるが、この一世界が一千個集ったものを小千世界という。この小千世界が一千個集ったものが中千世界、この中千世界がさらに一千個集ったものが大千世界である。この大千世界は小、中、大の各千世界から成っているので、三千世界あるいは三千大千世界という。」とみえる。

103 三省堂精選版『日本国語大辞典』に「仏語。三毒をいう。むさぼること、怒ること、迷い惑って理非のわからないことの三つの煩悩」とみえる。

104 丁福保が著した『佛學大辭典』によれば「華嚴大疏一曰：「開悟稱覺、離倒為正、至極為最。」

105 布施（ふせ）は、他人に財物などを施し、相手の利益になるような「与えること」を指す。すべての仏教における主要な実践項目のひとつである。

106「行菩薩道療治一切三千世界三毒之病、成最正覺、是布施報。」

107『証治準繩』は日本に輸入された年は「一六三九年」である。これは、真柳誠・友部和弘「中国医籍渡来年代総目録（江戸期）」『日本研究』７号151-183頁、1992年（2001、４、2009、２補訂）より。

108 唐蘭道人が著した『理傷続断秘方』のことである。

109 明薛己（号を立斎とした）の著作で、二巻があり、刊行年代は1529年となる。

110 高志鳳翼の書中の内容からみれば、明李梴が編註した『医学入門』（1575年）を指

していると思われる。

111 明王肯堂『瘍科証治準繩』（1601年）の略称である。

112 危亦林の『世医得効方』のことである。

113『正骨科』という書名をもつ書物は中医傷骨科著作の中にないが、京都大学附属図書館富士川文庫にはまったく同じ書名を書物が見つけている。『正骨科』には著者名または叙・跋が一切ないものだが、内容的には吉原元棟『杏蔭斎正骨要訣』（1789-1800年）と二宮彦可『正骨範』（1808年）に類似するところ多くある。しかし、この二冊の刊行年代より高志鳳翼『骨継療治重宝記』（1746年）のほうが年代的に古い。

114 別名は『袖珍方大全』または『周府袖珍方』であり、8巻がある。明李恒（号を伯常とした）が洪武二十四年（1391）に成書した。

115 李東垣『医学発明』のことである。

116『儒門事親』を指している。

117 明徐彦純撰、書名はもともと『医學折衷』だったが、明劉宗厚がその内容を加筆して、またその名を『玉機微義』に変えた。最初の成書は1396年にある。

118 晋王叔和による脈診専門書である。

119『金匱要略』は、張仲景『傷寒雑（卒）病論』の十六巻分量の雑病部分が単冊したものである。

120 真柳誠「『証治要訣』『証治要訣類方』解題」（『和刻漢籍医書集成』第7輯所収、エンタプライズ、1989年1月）によれば、「『証治要訣』『証治類方』の最終的な成立年代は、元末明初頃の一四世紀後半とするのが妥当な線であろう。そして胡濙の序が記すように、僧・西緒の手を経て正統六年（1441年）に監察御史の陳氏に伝えられ、一四四三年に序刊されたことになる。『証治類方』に「増入」と記される処方も、刊本として『証治要訣』の記述と対応させる体裁上、その際あるいは付加されたのかも知れない、という。

121 徐春甫の『古今医統大全』（1556年）のことであり、百巻がある。

122『普済本事方』の略称で、宋許叔微撰。

123『千金要方』また『備急千金要方』とも呼ばれる。著者は唐孫思邈である。

124 宋陳無擇『三因極一病証方論』の略称である。

125 本書はまた『医林類証集要』（1482年）と呼ばれ、王璽撰。綜合的な医書である。

126 李強「『世医得効方』対日本古代接骨術的影響」中国中医骨傷科雑誌、18（4）：58-61、2010

127　『三因極一病証方論』（1174年）、略にして『三因方』と呼ぶ。十八巻。宋・陳言撰。「医事之要、無出三因」、「倘識三因、病無余蘊」。病因を三因（内因、外因、不内外因）と分けられている。

128　顎関節のこと。

129　蹉跌（さてつ）：つまずいて足をすべらす。ちぐはぐになって、失敗するという。

130　『三因方』云：失欠脱頷、凡欠伸頰車蹉跌、但開不能合、以酒飲令大酔、睡中吹皂角末、嗜其鼻、令嚏、即自正。」

131『三因方』巻之十六舌病証候〔附失欠〕に「凡失欠頰車蹉、但開不能合、以酒飲之、令大酔、睡中吹薬搐其鼻、嚏透即自正。」

132『永類鈐方』（1331年）、李仲南撰、孫允賢補訂、二十二巻がある。

133『回回薬方』は元代に成書され、漢語で書いたアラビア医学や薬方をまとめる書物であり、全巻三十六巻で現存４巻しかない。猪飼祥夫は「『回回薬方』の鍼灸門について」という演題において、「『回回薬方』は明末の1619年に成立した」との観点を唱えている。（第114回日本医史学会・第41回日本歯科医史学会、2013）

134 前掲、『中国骨科技術史』

135 明王肯堂『瘍科証治準繩』傷損門に「草烏散」と書いている。

136 蒲原宏「杏蔭斎正骨要訣の校訂者和田謙堂の家系と同書の成立年代」日本医史学雑誌、51（2）：186-189、2005

137 吉雄耕牛（よしおこうぎゅう）：生卒は享保９年（1724）～寛政12年（1800）。江戸時代中期のオランダ語通詞（幕府公式通訳）、蘭方医。諱は永章、通称は定次郎、のち幸左衛門。吉雄幸左衛門は「成秀館」という塾を張り、700～1000人を超えたともいわれる門弟がいた。片桐一男「江戸時代　東西医学の対話――吉雄幸左衛門耕牛を中心として――」日東医誌、55（5）：827-838、2004

138 蒲原宏「『杏蔭斎正骨要訣』について」日本医史学雑誌、９（3-4）：90、1984

139『欽定四庫全書』『史記』索隠巻二十四、扁鵲倉公列傳第四十五に唐司馬貞の注に「撟引、身如熊顧鳥伸也」とある。

140 古代には、風車といえば数種類のものがある。ここでの風車ともっとも合致しているのは夏季の時に手で回す風扇のことであろう。宋李之彦『東谷所見』寒暑に「寒猶可禦　而暑不可避、涼亭水榭、風車簟枕、世不多有」とみえる。

141 鸞鳥が飛翔している様子。晉郭璞『山海經圖贊』南山經、鸞鳥に「鸞翔女床、鳳出丹穴」とみえる。類書『三才図会』からの引用で、神霊の精が鳥と化し、雄を鸞となり、雌を和と呼れる。

142 草が風の向きに随い倒れる様子。『論語』顔淵に「草上之風、必偃」とみえる。

143 鶴に跨る様子を表している。ここでいう「鶴跨」は「跨鶴坐」、すなわち日本式の正坐のことを意味しているかもしれない。一方、乗鶴、騎鶴という語もある。道教は、得道の後后鶴に騎って飛昇するという。宋林景熙『簡衛山斎』に「何當躡飛珮、跨鶴青雲端。」

144 回旋のこと。唐顧況『石竇泉』に「吹沙復噴石、曲折仍圓旋」とみえる。

145 遊（游）泳している魚の様子。漢王逸『機婦賦』に「高樓雙峙、下臨清池、遊魚銜餌、瀺灂其陂」とみえる。

146 シャクガ科のガ類の幼虫で、尺取虫（シャクトリムシ）のことを指している。別名は尺蠖（しゃっかく）、蚐蠖（おぎむし）がある。体が柔軟細長のため、屈伸して行くような愛嬌的な歩き方が知られている。処世保身の術として連想される。『易』系辞下に「尺蠖之屈、以求信也。龍蛇之蟄、以存身也」とみえる。

147「弄玉」の出典は２つがある。ひとつは、西漢・劉向『列仙傳』簫史には、「簫史者、秦穆公時人也。善吹簫、能致孔雀白鶴於庭。穆公有女、字弄玉、好之、公遂以女妻焉。日教弄玉作鳳鳴、居數年、吹似鳳聲、鳳凰來止其屋。公為作鳳台、夫婦止其上、不下數年。一旦、皆隨鳳凰飛去。故秦人為作鳳女祠於雍宮中，時有簫聲而已。」二つの出典は手玉や短刀などを空中に投げ上げて，これを巧みに受け止める曲芸の一種。『三代実録』（貞観三年（861））に「種々雑伎。散楽、透撞、咒擲、弄玉等之戯、皆如二相撲節儀一」とある。ここでの正骨術はむしろ２つ目の出典に合致する。

148 鶺鴒（せきれい）はセキレイ科の鳥で、主に水辺に住んでいる。背筋を表す「鶺」と冷たく澄むという意味の「鴒」で、背筋がすらりと伸びているという意味がある。その尻尾の動きが機微である。『詩経』小雅・常棣：「脊令（鶺鴒）在原、兄弟急難。毎有良朋、況也永歎。」

149 曲線形を表している。唐玄奘『大唐西域記』迦畢国に「又有如来髪、髪色青紺、螺旋右縈、引長尺余、卷可半寸」とみえる。

150 ツバメの尾または鏃（やじり）の一で、末端が二つに分かれたものの形を表している。『後漢書』輿服志下「負赤幡、青翅燕尾、諸僕射幡皆如之。」

151 出典は『史記』孝武本紀にある：「黄帝采首山銅、鑄鼎於荊山下。鼎既成、有龍垂胡鬚下迎 黄帝。黄帝上騎、羣臣后宮從上龍七十餘人、龍乃上去。」のちに「騎龍」は、皇帝が世に去ることを指している。清李調元『恭擬高宗純皇帝挽詩』之四：「病哭騎龍日、扳髯少一人。」ここでは、単なる患者の体を跨って乗せるような体勢を言う。

152「吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、為壽而已矣。此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也。」

153「若吹呴呼吸、吐故内新、熊經鳥伸、鳧浴蝯躩、鴟視虎顧、是養形之人也、不以滑心。」注釈に「…滑は乱るなり。言うこころは此れ形を養う者なるのみ。以て真人の心を乱すに足らず。(…滑亂也。言此養形者耳。不足以亂真人之心)」とみえる。それにしたがって「滑」を「乱」と訓読した。

154 晋葛洪『抱朴子』内篇雑應に「或問聰耳之道。抱朴子曰、能龍導虎引、熊經龜咽、燕飛蛇屈鳥伸、天俛地仰、令赤黄之景、不去洞房、猿據兔驚、千二百至、則聰不損也。」

155 李強「『千金要方』対中医按摩的貢献」按摩與導引、(4)：1－5、1986

156 明高濂編次、鐘惺校閲『遵生八箋』巻之九、婆羅門導引十二法。弘雪居重訂本、早稲田大学図書館蔵。

157 現在静岡県浜松市となる。

158 上瀉口武、他「石州浜田藩口中医二宮彦可について」日本歯科医史学会々誌、21(4)：256-257、1997

159 江戸幕府の法令により全国各藩の藩主を一年おきに江戸城に出仕させることである。

160 多紀元簡（1755-1810年）は、江戸時代後期の医師であり、名は元簡、字は廉夫とした。

161 桂川甫周（1751-1809年）は、医師及び蘭学者である。諱は国瑞（くにあきら）であり、甫周は通称である。月池・公鑑・無碍庵などの号も用い、字は公鑑である。

162 徳川吉宗、江戸幕府第八代将軍。

163『荘子』雑篇、列御寇に「夫千金之珠、必在九重之淵而驪龍頷下、子能得珠者、必遭其睡也‥‥‥」とみえる。後に「探驪得珠」を以て事の運びに肝心のことを掴んだ様子を喩えている。ただし、ここで、脱臼整復手技をみれば、顎関節を「珠」と譬えているようである。

164 顎関節脱臼に対する整復法のことである。

165 中国古典では、周武王が河を渡した時に、河中の魚が舟の中に飛び入れた伝説がある。『史記』周本紀に「武王渡河、中流、白魚躍入王舟中、武王俯取以祭」と、『漢書』司馬相如傳下に「蓋周躍魚隕杭、休之以燎」とみえる。

166 コレース骨折に対する整復法のことである。

167 肩関節脱臼に対する整復法のことである。

168 前掲、股関節脱臼に対する整復法のことである。

169「其法載於『聖済総録』、『証治（準縄）』之諸書、近世『医宗金鑑』所載摸、接、端、提、按、摩、推、拿之八法是予所謂別得其治者也、唯恨其法未得精細耳。」

170「今以『（医宗）金鑑』八法為経、新立母法十五、子法三十六以為緯。凡三百六十五節之傷損者、無所逃於此手法。」

171 天方はもともとイスラム教の聖地メッカ、のちに広範にアラビア諸国を指している。『明史』西域傳四、天方に「「天方、古筠冲地、一名天堂、又曰默伽」とみえる。清劉智『天方典礼釋要解』例言に「是書皆天方之語、用漢譯成文」ともある。

172「原紅花、一名紅藍、一名黄藍‥‥‥番紅花、一名泊夫藍、一名撒法、即出西番回回地面及天方國。」

173「番紅花出西番回回地面及天方國、即彼地紅藍花也。元時以入食饌用。」

174 http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/siryo-search/ecolle/igakushi/seikotsugen/seikotsugen.html

175 蒲原宏「日本整形外科の歴史――源流を開いた先達たち」関東整形災害外科学会雑誌、28巻臨増号外：23-24、1997